

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.142

2011/09/21

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

健全な森には「多様性」が保持される —あたりまえの話—



伐採予定地の植生調査(11/09/18)

貧弱な林床の草本層

山門湿原が形成されてから少なくとも3万年という途方もない時間、継続して湿原の状態を保っていることは、現在の湿原を取り巻く環境からすると不思議すぎる話である。現在湿原の周囲や内部で年間数回の土砂の除去作業を行っている。この作業で除去している土砂の量はかなりのものであり、作業を行わないと湿原は徐々に砂で被われることになる。しかし、編集子の26年間の観察では近年特に後背地からの土砂流入が増加しているように思われる。その理由も人と森の関わりと関係がありそうである。



近年後背地からの土砂流入が増加しているのは？



薪炭林としての活用が、
生物多様性も水環境も・・・

「山門水源の森」の生物の多様性が保全されて来たのには、何百年にもわたる里人が、この森を「薪炭林」として活用してきたからであることは、これまでも度々書いてきた。また本会が発足以来続けている保全活動は、活用が無くなり人手が入らなくなった森に生活とは切り離れた形で人手を入れることで、生物の多様性の維持を図ってきた。



下層植生が無いアカガシ林

「薪炭林の生物多様性の維持」には、40年以上放置されてきた森の樹木の伐採によって森を若返らせる必要がある。このことには早くから気付きながらも、当地が「保安林」であること、さらにその作業量が多いこともあり、局部的な除伐や間伐で今日に至っている。しかし、滋賀県下で進行している「ナラ枯れ」現象が年々南下し広範囲に及んでいる。この現象も二次林の放置から来る問題であり、山門水源の森でもこのことを再度見直す必要がある。2006年晩秋に、森林の若返りを考え南部湿原の斜面で除伐を行ったが、それ以降の現地の変化を吟味してみた。伐採から5年が経過した現在、下層の被植率は100%である（コナラ等の萌芽の一部はシカの食害に遭っているが）。他方アカマツ-コナラ林の萌芽更新を目的に、伐採予定地の植生調査を実施しているが、下層植生はどの地点も非常に貧弱である。これは長い間伐採を行っていないため日照条件が悪くなったためである。またアカガシ林では、下層植生が限りなくゼロに近い地点も多い。このような林床条件に最近のような異常降雨があると、斜面崩壊を伴う大量の土砂生産が起こり湿原に運搬される。それを避けるためには、湿原の後背地の森林管理に主力を注ぐ必要がある。この管理は、かつて薪炭林として活用された時代のペースでの森林伐採を15～20年周期で実施する。年間の森林伐採面積は、狭い範囲にとどめるのが望ましい（同一裸地条件の場所を多くしないため）。その点かつての森林伐採は、鋸による伐採であり広範囲の伐採が行われていなかったことも、湿原への土砂流入が少なかった要因とも考えられる。

